

日本家政学会  
被服構成学部会誌

第28号

平成19年3月



# 目 次

・ごあいさつ	1
・平成 18 年度 被服構成学部会 総会	3
・平成 18 年度夏期セミナー	
プログラム	4
基調講演「わかりやすい授業のための IT 技術」	5
事例紹介	6
演習 1 日目 実習指導のための動画教材制作	7
演習 2 日目	8
夏期セミナーに参加して	9
・平成 18 年度 研究例会	
プログラム	10
文化学園服飾博物館見学	10
基調講演「男のシャツ」	11
・平成 18 年度 (社) 日本家政学会大会 部会企画シンポジウム	12
・IFHE COUNCIL MEETING 2006	13
・平成 17 年度文部科学省科学研究費補助金による公開講座 「布と糸と針が拓く未来ー楽しいものづくり, 創造性育成と技の伝承ー」	14
・TX 記念 第 7 回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告	16
・研究報告 アパレル CAD 教育システムの開発	17
・関連学会短信	
日本繊維製品消費科学会	19
繊維学会	19
服飾文化学会	20
日本衣服学会	20
・平成 18 年度修論テーマ・要旨	21
・会務報告	22
・平成 17 年度 収支決算報告	23
・平成 18 年度 予算	24
・お知らせ	25
・ご案内	26
・被服構成学部会 会則	27
・平成 18・19 年度役員	29
・入会申込書	31



## ごあいさつ

**(社) 日本家政学会被服構成学  
部会長 猪又美栄子 (昭和女子大学)**

卒業生を送り出し、新入生を迎え入れる季節になりました。部会員の皆様には、新しい年度に向けて、お忙しくご活躍のことと思います。この1年間、運営委員をはじめとする部会員の皆様方のご支援とご協力をいただきありがとうございます。感謝申し上げます。昨年5月の家政学会大会では、大村知子前部会長をコーディネーターとして被服構成学部会企画のシンポジウム「衣服のユニバーサルデザインを考える」が行われました。おかげさまで、大勢の方に参加いただきました。日常着用する衣服が快適な着心地の良い衣服であることは、高齢者だけでなく若者にとっても重要なことではないでしょうか。衣服設計の立場からは、子どもから高齢者までの幅広い身体状況に対応する衣服の構造、パターン、素材等のデータベースが必要とされているように思います。被服構成学部会員の皆様の研究成果や蓄積された経験を合わせ、整理していくことで、データベースの基礎を作成することができるのではないのでしょうか。そして、不足している部分は実験や調査を重ねて、さらに充実させることができるのではないのでしょうか。短時間での実現はなかなか困難ですが、被服設計に関わるデータベースが構築できることを夢見ています。

平成19年度の部会活動計画は以下の通りです。

8月には総会と夏期セミナーを行います。岡部和代実行委員長を中心に実行委員の方々が準備を進めて下さっていますが、詳細は26頁の「ご案内」に掲載されている通りです。開催地の神戸の情報網を生かして、「ファッションの魅力」というテーマで計画されました。多くの方が関心を持たれるテーマだと思いますので、非会員の方や学生さんも誘ってご参加下さい。そして、被服構成学部会員になっていただきましょう。3月には、研究成果を公開するシンポジウム「生活を豊かにする衣服ー着心地の良い快適な衣服を求めるためにー」を、東京で開催する予定です。心身ともに快適になる着心地の良い衣服についての部会員の研究成果を広く社会に広報し、還元することによって、消費者に有効な情報を提供し、衣生活の向上に役立てることを目的としています。布施谷節子実行委員長を中心に進めて頂きます。ポスター展示も取り入れ、多くの研究成果発表ができれば良いと考えています。詳細はこれから決めますので、ぜひ部会員の皆様からご意見や、研究成果の情報を布施谷実行委員長はじめ部会運営委員にお寄せ下さい。また、平成14年度から行っている全国中学生創造ものづくり競技会への後援・協賛も引き続き行います。鳴海多恵子運営委員が担当して下さいます。

最後に、被服構成学部会の規則(27頁)についての報告とおわびです。被服構成学部会の規則の名称が「会則」に戻りました。平成15年度総会でそれまでの会則から規約に名称変更しましたが、その後日本家政学会で部会会則に統一することになりましたので、平成18年度総会の承認を得て会則に戻しました。次に、被服構成学部会の申し合わせについてです。その中の運営委員会の項に、「…庶務3名(1名は部会誌編集担当)、…」の記述がありますが、昨年度の部会誌の次期部会長あいさつにありますように、平成18年度は運営委員の担当を設けましたので、編集は庶務から独立しました。総会にかけて運営委員会に記述を変更する必要がありましたのに、それを怠っておりました。平成19年度の総会でご承認を得たいと思います。不手際で、大変申し訳ありませんでした。

引き続き、平成19年度もよろしくお願い申し上げます。



# 平成 18 年度 被服構成学部会 総会

## プログラム

日時：平成 18 年 8 月 22 日（火）

会場：東京家政大学

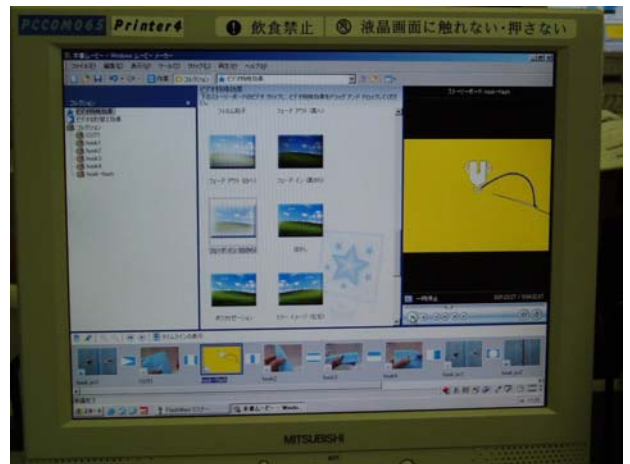
平成 18 年度被服構成学部会総会は富田明美委員の司会で下記のとおり進行した。

- |                          |       |
|--------------------------|-------|
| 1 開会の辞                   | 泉 加代子 |
| 2 部会長あいさつ                | 猪又美栄子 |
| 3 報告                     |       |
| (1) 平成 17 年度事業報告         | 大塚美智子 |
| (2) 平成 17 年度科研費による公開講座報告 | 泉 加代子 |
| 平成 18 年度事業中間報告           | 千葉 桂子 |
| 4 議長選出                   | 福井 弥生 |
| 5 議事                     |       |
| (1) 平成 17 年度会計報告         | 植竹 桃子 |
| (2) 平成 17 年度会計監査報告       | 林 隆子  |
| (3) 平成 18 年度予算案          | 布施谷節子 |
| (4) 平成 18 年度事業計画案        | 田中 百子 |
| 6 議長解任                   |       |
| 7 その他                    |       |
| 8 閉会の辞                   | 雲田 直子 |

上記の内容について審議，承認された。



総会風景



演習 編集画面の一例

**平成 18 年度被服構成学部会夏期セミナー**  
**被服構成学の研究・教育に生かすプレゼンテーション技術 Part II**  
**—動画を教材に取り入れよう—**

期日 : 2006年8月22日(火), 23日(水)

会場 : 東京家政大学 10号館4F104Bコンピュータ室&3F103講義室

	8月22日(火)		8月23日(水)
10:00 10:30 10:35~11:35  11:40~12:20	受付開始 開会の辞 基調講演「わかりやすい授業 のためのIT技術」 東京家政大学教授 松木孝幸  部会総会	9:30~11:30   11:30~12:00	<b>演習Ⅱ</b> 「動画素材制作」続き ・動画の編集 編集のねらい 作業環境  自習
昼食休憩			昼食休憩
13:20~14:20  14:20~15:20  15:20~15:40 15:40~17:10  17:30~19:30	事例紹介 コーディネーター 和洋女子大 布施谷節子 1 昭和女子大 猪又美栄子 2 横浜国大 薩本 弥生 3 東京学芸大 鳴海多恵子 4 東京家政大 田中 早苗 <b>演習Ⅰ-1</b> 東京家政大学(非常勤) 三村 坦 「プレゼンテーションタイトルの 企画」 休憩 <b>演習Ⅰ-2</b> 「動画素材制作」 ・素材の用意 撮りとキャプチャー 懇親会 東京家政大ラウンジ	13:00~13:30  13:30~15:30  15:30~15:50 15:50~16:50  17:00	自習  <b>演習Ⅲ-1</b> 「動画素材制作」 ・動画の編集続き ビデオクリップ  休憩 <b>演習Ⅲ-2</b> 「動画編集」(解説) 「まとめ」  閉会の辞



## ＜基調講演＞

### 「わかりやすい授業のための IT 技術」

東京家政大学 松木孝幸氏

わかりやすい授業を行うために、われわれは教材の製作をいろいろ工夫して行ってきた。中でも、パーソナルコンピュータの普及により、IT 技術を使った教材を製作しなければならないことが多くなった。平成 12 年度の夏季セミナーは、デジタル時代に対応して「パワーポイントでできること」をテーマに開催され、われわれは CG を利用した技術を修得することが出来た。しかし、静止画ではどうしても学生に伝えられない部分が多く、時代の波は動画へと進んでいる昨今、詳しい知識を得る間もない内に、必要に迫られて何とか使っているのが現状といえる。

コンピュータシステム管理センター所長の松木氏による今回の基調講演では、日ごろ我々が知りたくともなかなか知り得ない基礎的なことについて、内容を大きく 2 つに分け、一つは授業教材作成のためのちょっとしたことだけれども直ぐには分からないことを数点、特に動画についての説明を、もう一つは作成した電子教材を管理するための学習管理システムの紹介をしていただいた。

まず一つ目の内容は、動画の編集についてのヒントとして、①デジタルビデオ接続用のポートである i リンクとは、② i リンクに対応していない PC を使うためのビデオカメラと PC の接続方法や、デジタルビデオカメラや DVD・SD カードについて、③VHS テープのアナログ信号をデジタル信号に A/D 変換して取り込む方法、④デジカメの動画を「マルチカードリーダー」で取り込む方法、などについて具体的に例を挙げていただいたの説明が行われた。その後取り込んだ動画のデータの種類について①動画データが大きく分けて「AVI ファイル」「MOV ファイル」「MPEG ファイル」があること、②データの圧縮について、③データが各社独自のフォーマット形式が混在しているため相互の変換が必要であること、④出来上がった提供ファイルを PDF ファイ

ルに変換すること、などの説明をしていただいた。

これらのことは、日ごろわれわれが目、耳にしていながらも、なんとなく通り過ぎてきた場当たりのなことであり、改めて確認させていただけたことと思う。

次に、LMS (学習管理ソフト) について、e-Learning 教材が手元にあるとき、それをいかにして学生に有効活用してもらうかを考え、各種の機能をそれと有効に結びつける工夫をこらした管理ソフト「BlackBoard」、 「WebCT」等の有名なものの説明に加え、「Moodle」というフリーソフトの紹介があった。さらに、Moodle ソフトの日本語サイトのホームページとそれを利用したサイト「情報教育 Moodle」の画面が紹介された。これらは、学生と教員間の双方向的掲示板としても使い、さらに学習の幅を広げるために重要である。

今回の講演により、今更誰にも聞けないけれども知らずにこの先に進めないと思っていたことが少しは理解できたと思っているのは、私だけではないであろう。今後、今回の基調講演で教えていただいたことを自分のものにして、学生に対して分かりやすく楽しい授業を行い、被服構成関係の教科が好きな学生が増えることを期待しつつ、松木先生に感謝いたします。

(記録 原田妙子)



松木氏の講演風景

## ＜事例紹介＞

今回の夏期セミナーのテーマは「動画を教材に取り入れよう」というものであった。しかし、動画をどのように作り、活用すればよいのかがわかりにくいとの声もあり、今回は4名の先生方から実際に作成し、使われている事例についてご報告していただいた。各々の先生方はとても工夫されて、見やすくわかりやすい動画を提示してくださった。ただ、動画を再生する際には、PCの容量の問題やソフトウェアの問題であるのか、発表の途中などで画面が止まるなどの不具合が起きることもあるとのアドバイスもだされていた。それぞれの方の報告について以下にまとめた。

### 1. 「動作を動画で」

昭和女子大学 猪又美栄子氏

猪又先生は、衣服の動作適応にかかわる教育や研究の中での動作観察について動画を利用してはどうか、ということで一例を示して下さった。衣服による動作拘束の例として2種のブラウス着用実験の動画であった。動作観察は被験者となる学生も恥ずかしがってなかなか正確な観察が難しい面もあるが、その点、ビデオを使用すると繰り返し再生も出来るので、教育上も便利で有効なツールであることが再確認することができた。

### 2. 「衣生活を支える被服学」

横浜国立大学 薩本弥生氏

薩本先生は、被服学各分野の内容を学生に教育するために工夫し作成された動画教材の一例を紹介された。パワーポイントのアニメーションを使った被服材料・衛生・管理の実験風景や結果についての提示方法も示された。また被服実習の発表会の様子では、学生のプレゼンテーション能力の高さが紹介され、男子大学生が積極的に取り組んでいる姿が印象的であった。

### 3. 「公開講座シンポジウム（2006）の プレゼンテーションスライドの紹介」

東京学芸大学 鳴海多恵子氏

鳴海先生は2006年の公開講座シンポジウムでの説明資料の紹介がなされた。「道具の観点から」ということで、できるだけわかりやすく、興味を引く、迫力のあるものとお考えになられ、ハイパーリンクを使って2つのパワーポイントのファイルと7つの動画をリンクさせていた。家庭用ミシンと工業用ミシンのスピードの差を音と針の動きで示されたり、すくいぬいミシンが作動している様子、その他いろいろなミシンが動く様子などわかりやすく示された。

### 4. 「Flash MXによる着物の裁ち方ムービー」

東京家政大学 田中早苗氏

田中先生は、着物の裁ち方について、反物の長さとお幅を変えずに裁ち方を示すために、長い反物が畳み込まれていく様子をアニメーションで示された。

和裁初心者や外国の方にも着物の構造を解説することを目的とし、着物の雛形からパーツが展開し、連結して反物に戻るといったストーリーになっていた。画像数は約200フレーム、再生時間は23秒のムービーであった。以下にムービーの画面の一例を示す。

(記録 別府美雪)



## <演習1日目>

### 「実習指導のための動画教材制作」

東京家政大学 三村 <sup>ひろし</sup> 坦 氏

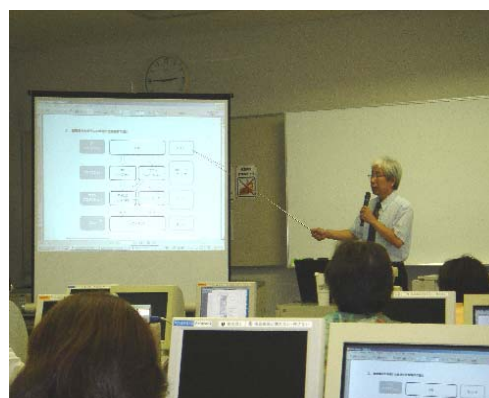
8月22～23日に東京家政大学において「構成学の研究・教育に生かすプレゼンテーション技術 Part II—動画を教材に取り入れよう—」というテーマで夏期セミナーが行われた。開催に際し、実行委員長の雲田直子先生がPowerPointの基本を学んだ「Part I」のセミナーは既に6年前のことになったとお話しになった。個人的には、あまり複雑な使い方はできないながらも日常的に授業で使えるようになったのは「Part I」に参加したことがきっかけであったと思っている。これまでにPowerPointに動画を取り入れたことはあったが、動画の本質についての知識はあいまいであり、今回のセミナーではそれらについて理解を深めたいと思い参加した。

講師の三村 坦先生は、東京家政大学や様々な教育機関における情報処理教育に携わり、Web構築をはじめとするコミュニケーション・デザインや情報デザイン教育の標準モデル策定プロジェクトに参画されているとのご紹介があった。三村先生は、情報デザインとはコミュニケーション・デザイン、すなわち「伝えるためのデザイン」ということを中心に考えていらっしゃるとのことであった。近年メディアの開発が著しく、双方向のネットコミュニケーションが発達しているが、コンテンツ—誰に対して何を伝えるか—という内容がとても重要であると述べられた。参加者である私たち教員の仕事も「伝える」ことが基本であり、そのために動画を活用することは学生の五感を刺激して疑似体験を可能にさせるために効果的であるというお話を伺い、実際の演習に進んでいった。

一日目には【I. 動画素材を用いたプレゼンテーションタイトルの企画】、【II. 動画素材の撮りとキャプチャー】【III. ムービーの編集とオーサリング】のほぼ前半部分までを演習した。今回は「ホック付けの

ボタンホールステッチ」を動画教材として作成することが課題とされた。ホック付けで重要な糸かけを確実に把握させることが目的である。使用した動画の編集ソフトはWindowsムービーメーカーで、ほとんどの参加者にとって新規購入が不要である点もメリットに感じた。【I】においては動画教材における計画性の大切さを、【II】においては撮影した動画の形式にマッチする編集ソフトについて、詳細に解説された。各自の作業は【III】から始まった。まずムービーメーカーを立ち上げて事前に用意された複数の動画ファイルを読み込み、それらをつなぎ合わせた。三村先生のご説明がご丁寧でとてもわかりやすかったので、問題なくクリアできた。耳にしたことはあっても、意味を十分理解していなかった専門用語についても知ることができた。先生はまた、まずソフトに慣れることが大事ともおっしゃっていた。やはり学習活動においては忘れないうちに復習することが重要であることを改めて認識した。

2日間の演習は、内容が多岐にわたりながらも、一つひとつのステップを確実に積み上げていける構成になっており、講師の先生やセミナー全般のご準備に当たられた実行委員の先生方のご苦勞に感謝を申し上げます。  
(記録 千葉桂子)



三村氏の講演風景

## <演習 2 日目>

演習 2 日目は、第 1 日目の演習で、動画素材を用いて制作した『ボタンホールステッチによるカギホックの取り付け方』という事例のラッシュプリントを題材にして、さまざまな編集方法を具体的に教えて頂いた。

編集とは、1 本になっているラッシュプリントの不必要な部分をカットしたり、あるいはカットした部分の前後が不自然なつながり方とならないためのオーバーラップのさせ方、動画と静止画像を自然につなぐ方法、さらに画面にタイトルやテロップを入れたりすることなど、実にたくさんの作業がある。

まず、「動画とは、1/100 秒単位の静止画像が何枚もコマ送りされているもの」であり、動画制作は緻密な作業の積み重ねであることの再認識から始まった。

用いたソフトは、Windows XP にインストールされている「ムービーメーカー」である。取り込んだムービー素材を試写し、絵コンテ（編集方針）の流れに沿って、ストーリーボード上で NG カットしたいところや静止画像を加えるところを見つけ、ひとつひとつ作業していく。カット部分のつなぎ目が不自然にならないようにオーバーラップさせたり、挿入カットの切り替え部分にトランジション効果をつけて挿入カットに自然につながる方法や動画から静止カットへの移行カットからカットへの時間の推移を印象づける場所はフェードでつなぎ、作業の完結へと誘導するなど、動画教材として見る側に分かり易い動画にするための数々の方法を、実際に三村先生がデモンストレーションして下さるモニター画面を横にしながら取り組んだ。

モニター画面と行き届いた丁寧な解説に支えられ、難しい編集作業をスムーズに行うことができ、制作した動画をプレビューし、午前中のメニューを終了した。

午後からは、制作した動画に絵コンテに従って、オープニングタイトル、サブタイトル、字幕スーパー、エンディングロールを挿入していく方法を演習した。これらの作業も 1/100 秒単位の作業の積み重ねであり、タイムラインに字幕を入れるタイミングが難しく、編

集作業は時間を費やすものであったが、動画をより完成度の高いもの（目的に合った魅力的な動画）へと導く作業であり、いろいろな効果をもたらす技法を学ぶことができた。多用するとかえってわずらわしい印象を与えてしまうことなどポイントを教えていただきながら、先生のシミュレーションに従って、完成間際の作業を各自いろいろな出来上がりを目指して楽しんだ。そしてそれぞれの編集結果をムービーとして保存、再生しこれまでの作業の確認を行った。

最後に、ビデオ編集したムービーを、Flash というソフトを用いて、任意のタイミングで再生・停止・1 フレームずつ前後に移動再生など、対話式の再生機能を持たせる方法の解説があった。

2 日間、約 7 時間の演習で、初心者私にも動画教材制作の方法および要点を何とか理解することが出来た。とても詳しいテキストと演習内容を組み立てて下さった講師の三村先生、万全の作業環境を整えて下さった実行委員の先生方のお蔭で、大変有意義な事例演習であった。

(記録 林 仁美)



演習の風景

## 夏期セミナーに参加して

埼玉大学 教育学部  
川端博子

今年のテーマは、「動画を教材に取り入れよう」であった。松木先生の講演は、画像編集の取り込みに関する初歩的な説明から始まった。さまざまなツールが普及し、次々とモデルチェンジしていく中で、ケーブルの接続やマニュアルに書かれた用語の知識がないためにスタートからあきらめてしまうこともある。初心者にとってありがたい説明であった。

その後の事例報告は、4人の先生方の視聴覚教材を用いた授業実践であり、視点もそれぞれで新鮮かつ興味深いものであった。被服学関連の先生方から講義ノウハウを学ぶ機会もなかったし、自分の授業は数十年前に受けた大学の講義が基準となったまま進化していない... 教育学部で教鞭をとる者にとって、先生方の工夫と日々の努力に刺激を受けつつ、反省しきりの自分であった。

残りの時間は、パソコン操作の実習に充てられた。三村先生はゆっくり進めて下さったにもかかわらず、戸惑うことばかりで助手の学生さんをお抱えにしまった。加齢とともに操作の腕は衰えるのに対し、図々しさは成長していくようだ。自分の粘りの強さを武器に復習して追いつくしかないと思った。覚えているうちに再度挑戦しなくてはならない。

以前は7月に入る頃から9月いっぱいまで研究に打ち込む時間があっただように思う。しかし、今日は授業の終了は8月に食い込み、その後、補講や成績付けが終わるともう8月後半である。そんな状況の中で、一日中勉強に専念できる機会のひとつが構成学部会の夏期セミナーである。講師の先生、実行委員の先生方にご尽力いただいたことに感謝し、次回も興味深いテーマを期待します。

## 夏期セミナーに参加して

昭和女子大学大学院 生活機構研究科  
下坂知加

私は今まで写真をパソコンに取り込んで編集することはありましたが、動画については、編集はおろか、いじったこともありませんでした。自分で自由に動画を編集することができたら便利だろうと思いつつ、独学するには少し難しい分野でもありました。そのような折りに本セミナーがあることを教えて頂き、チャンスとばかりに参加させて頂きました。

二日間の内、初日の午前中は、動画編集関連についての基礎的な知識、例えばDVデータ変換ケーブルやPCに取り込むための媒体、また保存する際のデータの圧縮やデータの変換、さらには学習管理システムなど、最新の情報と共に教えて頂きました。午後は、先生方の動画を使用した事例紹介を拝見し、動画を利用することが受け手にとって大変わかりやすく、また発表者の意図を明確に伝える手段として効果的であることを実感致しました。その後、Windows XPに搭載されているムービーメーカーを使い、一連の基本的な操作方法を教えて頂きました。

二日目は、動画の不必要な部分のカットの仕方、カットした部分を目立たせないような処理の仕方、また動画にタイトルや字幕スーパー、クレジットロールを挿入する方法について教えて頂きました。自作の短編映画を作っているようで面白かったです。

先生のご指導と教材が大変わかりやすく、二日間で学んだとは思えないくらい沢山のことを得ることができ、大変充実した有意義な二日間でした。動画編集は、研究成果の発表プレゼンテーション、衣服の動作適応の観察など、これからの私にとって大変実用的であり、本セミナーに参加して本当に良かったと大満足しております。今後も、このようなセミナーがありましたら、是非とも参加したいです。素晴らしいセミナーを企画して頂き、どうもありがとうございました。

## 平成 18 年度研究例会

### <プログラム>

10:30～10:45 部会長挨拶 猪又美栄子

11:00～12:00 文化学園服飾博物館見学  
「おとこのおしゃれ」  
世界の男性衣裳にみる美意識

ギャラリートーク  
文化学園博物館学芸員  
吉村紅花氏

12:00～13:30 昼食

13:30～15:00 講演  
「男のシャツ」  
デザイナー 嶋崎隆一郎氏



### <文化学園服飾博物館見学>

#### 「おとこのおしゃれ」世界の男性衣裳にみる美意識

文化学園服飾博物館は、日本、諸外国の服飾・染織を中心にその関連資料を多く所蔵している。

今回は、「おとこのおしゃれ」と題し、日本の武士の衣裳や公家の流を継いだ近代の装束、庶民の服飾や、ヨーロッパをはじめ、アジア、アフリカの民族衣裳を紹介し、地域や時代、身分によって育まれた男性の服独特の美意識を探る、特別展であった。

最初に学芸員の吉村紅花さんより、展示全体の説明とパンフレットにある『凜・麗・華・猛』の文字に象徴される内容として、第1室に、普段着、儀礼服、祭り、戦衣の4分類で展示されているという解説をいただいた後、館内を自由に見学した。



第2室には、現代の礼服と、フロア中央には、午後に講演をいただいた嶋崎隆一郎氏の作品が展示されており、講演後、再度博物館を訪れた先生もいらした。また、銀座一番館洋服店の高級仕立ての背広とその材料、仕立ての経過がわかりやすく展示され興味をそそられた。パネル展示による仮縫いの風景には、博物館の依頼により学園の理事長が仕立てのモデルとなって、話題提供に一役買っていた。

ご参加の先生方からは、構造、着用方法、素材、



歴史背景、展示方法など、部会ならではの専門的な質問がされていた。館内は、ウインドウの壁面にある鏡によって衣裳の後ろ側も見える工夫が施されていたり、着装状況が掲載されている書物と共に展示されたり、細部にわたって、各国、各時代の男性のこだわりと美意識を肌で感じる事の出来る見応えある展示であった。

(記録 磯崎明美)

## <基調講演>

### 「男のシャツ」

デザイナー 嶋崎隆一郎氏

講師の嶋崎隆一郎氏は、今年8月出版の「男のシャツの本」(文化出版局)の著者である。1988年に文化服装学院アパレルデザイン科卒業後、天野勝デザイン室に入社し、無印良品のメンズデザインを担当。1993年に独立して、同じ無印良品のレディースをデザインしていた佐藤ひさこ氏と共に、「beige shop」ブランドを立ち上げる。翌年の1994年に新宿伊勢丹「解放区」にてデビューすると同時に、東京コレクションに参加。1997年に自身のメンズブランドRYUICHIRO SHIMAZAKI hommeでも東京コレクションに参加し、現在はニューヨーク・ブランドのライセンスデザインや大手アパレルのデザインコンサルティング、ブランドディレクションを行うかたわら、日本を代表する鉄道会社や自動車会社などの企業制服のデザインも手がける。

講演は、氏がデザインを手がけた制服の紹介から始まった。ニッサン自動車の整備士・モーターショーの女性の制服、JR東日本の一般社員・点検士の制服などが紹介された。東京タワーや国立競技場などで開催された東京コレクションは、その意表をつく会場とともに、発表された作品は、緊急時にそのまま眠れるダウンの服、足くるぶし丈のセーター、ピアスを襟につけたシャツ、スタンプ付シャツなど、個性的なデザインばかりであった。1998年秋冬のテーマ「フランケンシュタイン」の作品の中から、服の上から包帯を貼り付けた状態で着られる衣服、夜中に光る全身反射素材の衣服などが紹介された。ここまで、常識破りの創造性豊かなデザインを見ると、氏のデザインコンセプトが分かったような気がした。

本題の「男のシャツ」に入る。男の服には理由があり、衿やカフスには必然性がある。衿について、まずボタンダウンシャツはポロ競技の時に衿が邪魔で糸で衿に留めつけておいたことが始まりである。ブルックスブラザーズ社ではこれを「ポロカラー」と呼んでいる。メンズデザイナーの仕事は、今、一



番新しいのは何かを考えることである。過去にあったものの組み合わせを変えたりする。男の服にはレディースにはない基本ルールがある。イギリスではシャツはインナーのニュアンスが

あり、女性の前ではシャツになってはいけないという考えがある。シャツは身幅・肩幅が広いカジュアルシャツと、ジャケットの下に着るドレスシャツに大別できる。ドレスパターンの適正なパターンはアームホールの縫い目と脇縫いが直線になることである。また、着こなしについて、スマートに見えるシャツの袖のまくり方はカフスの半分の幅で細く折った方がよい。

最近のシャツには、着用した時に衿先が水平に見える水平カラー、見返しと表衿が1枚続きになっているイタリアンカラーなど、衿のバリエーションがみられる。全体的に衿幅は狭く小さくなってきている。シャツばかりでなく、ジャケットの衿幅も狭く、ネクタイは細く、ジャケットやパンツ丈は短くて細い、1960年代のモッズスタイル復活の兆しがある。

講演後、フロアからは多くの質問が出された。リクルートスーツについてどう考えるかの質問に対して、ファッションが全面に出るとその印象が強くなるが、ファッションが画一化しているとむしろ中身がよく見えてくる、という嶋崎氏の回答が心に残った。(記録 川上梅)



**平成 18 年度（社）日本家政学会大会**  
**部会企画シンポジウム被服構成学部会主催 色彩・意匠学部会協賛**

**「衣服のユニバーサルデザインを考える」の報告**

静岡大学 大村知子

本シンポジウムは、被服構成学部会企画として、平成 18 年 5 月 28 日(日)10:50~11:50、秋田大学 G1-305 教室に於いて開催した。シンポジストは部会員の猪又美栄子氏(昭和女子大学)、川上梅氏(東京家政学院大学)、芦沢昌子氏(青葉学園短期大学)で、コーディネーターは大村が務めた。シンポジウムの内容を検討する過程で被服構成学部会のメンバーでもある芦沢氏が色彩・意匠学部会長として協賛する形での参加となった。

近年、「ユニバーサルデザイン」が様々なところで取りあげられ、行政の施策としても謳われている。ユニバーサルデザインと銘打った商品や企画も多く、被服についてもこの傾向は例外ではない。

しかし、これらの多くが「ユニバーサルデザインの要件」を必ずしも満たしているとはいえないことを痛感していた。平成 16 年度被服構成学部会夏期セミナーや平成 16, 17 年度研究例会、平成 17 年度総会の講演もユニバーサルデザイン関連テーマであったが、「ユニバーサルデザイン」についての認識に違いがみられた。

「衣服とユニバーサルデザインとは」について再検討し、部会員はもとより広く家政学会会員のコンセンサスを得て、共に研究・教育を進める必要性を実感していたことが、シンポジウム企画の動機であった。

シンポジウムでは、これらの経緯を説明した後、先ず、猪又美栄子氏が、ユニバーサルデザインの基本的概念について述べ、その概念を衣服設計にも取り入れることを必要とする社会背景について概説した。次いで、着衣基体の個々の特性を包含する被服設計の事例

について、着脱動作の解析結果に基づく提言をし、ユニバーサルデザイン設計例として、異なる身体状況で同一デザインの衣服を着こなすことをめざした衣服設計・製作事例を示した。

次に川上 梅氏が、年齢によって身体機能と体型がいかに変化するかということを示した。さらに体型の年齢変化について各部位の寸法や体型の解析結果を用いて述べ、高齢者を例に体型特性と衣料サイズ適合性の問題点を明らかにした。ユニバーサルデザインにおいてはこれらをいかに解決するかが課題であるという提案をした。

最後に芦沢昌子氏が、色と安全に関する視点から述べた。高齢化に伴う視覚の変化、生活環境の明るさや背景色による色の認知力(目立ちやすさ)の差などについての問題提起をして、それらを配慮した衣服デザインの事例を示した。さらに、高齢者以外にも、数十万人のロウビジョン、300 万人といわれる色覚に特性のある人などの実態に言及し、カラーユニバーサルデザインのニーズが大きいことを示唆した。会場は満席で被服学以外の領域からも多数の参加者があり、関心の高さは予想以上であった。質疑応答の時間が短縮されたが、志を同じくする研究者がこの企画をきっかけに研究・教育に邁進することを期待しながら閉会した。

今後、研究成果を蓄積し、被服学としての確かなデータベースが構築され、衣服設計の際、いつでも誰でもそれらのデータを基礎資料として利・活用できるようにすることが課題であると痛感している。



## IFHE COUNCIL MEETING 2006

実践女子大学生生活科学部 高部啓子

IFHE COUNCIL MEETING (国際家政学会評議会)が、2006年7月16(日)～21日(金)に南アフリカ連邦共和国ケープタウン市で南アフリカ家政学会主催のもとで開催され、24カ国から135名の参加者が集いました。この評議会は2年に1回開催されるもので、評議員でなくとも参加は自由です。IFHEとしては多くの参加を望んでいるため、評議会だけでなく、研究発表やシンポジウムを同時に開催して参加しやすい企画を心がけています。評議会の詳しい内容は、家政学会誌1月号をご覧ください。

ここではワークショップとアカデミックエクスカージョンの被服に関わる部分を記します。

ワークショップは「テキスタイルアート、クラフト、デザインにおける環境保護意識と持続可能な開発」というテーマで Textiles and Design PC が企画しました。これは IFHE にある 8 つの Program 委員会(PC)の一つです。アメリカからの「サンノゼキルト&テキスタイル博物館コレクションの宝物」、「コンピュータ活用によるテキスタイルプロジェクト」、「学習プロジェクト:標準テストを使用したテキスタイルの質試験」、韓国からの「マタニティウェアの形態及び動作適合性の改良」、フィンランドからの「ハンドメイドテキスタイル、質と持続的開発」の5件の発表がありました。韓国の発表以外は実践報告のような内容でした。参加者は約10名とわずかでしたが、和気藹々の雰囲気で行われました。

アカデミックエクスカージョンは4種類が企画され、そのうちの Textiles & Design に参加しました。当日は嵐を思わせる土砂降りの中でのバスの移動となりました。参加者はカナダ、フィンランド、ナイジェリア、オランダ、韓国、日本、南アフリカの各国1名、計7

名でした。まずウエルネスセンターでクラフト技術が貧困者の収入を得る手立てとなるよう指導しているという話を聞き、クラフトセンターで、さまざまな手工芸品が展示即売されているところを見学しました。次いでイギリス人がはじめたという、使用済みの紅茶ティーバッグを利用してコースターなどをデザインし、手工芸品として出荷している工房を見学しました。ここでは若い貧困層の男女が強烈な化学薬剤の臭いの中、作業をしていました。次いでステルンボッシュという歴史的な街にあるステルンボッシュ大学を訪問し、テキスタイル科学が専門という先生から話を聞きました。かつては被服に関連する学科であったが、改組され、現在は化学学科に所属しているとのことでした。ナノファイバーを使った布や、呼吸する布など日本でも開発されているものの説明を聞きましたが、韓国と日本以外の参加者は、はじめて見聞きしたとのことでした。

IFHE において被服学の領域はまだ歴史が浅く、まとめ役のフィンランドの先生は比較的若い方で、このPCを発展させようと意気込んでいらっしゃる様子が窺えました。家政学会誌に掲載されますが、来年のスイス大会では Research 委員会(研究発表)、Program 委員会(実践報告)、Good Practice の3種類の発表機会が準備されています。さらに被服PCではテキスタイル展示発表を用意しています。この機会に参加してみたいかがでしょうか。

最後になりましたがケープタウンはとても美しくすてきでした。スラムのような隔離された場所と南欧を思わせる建物とが共存する不思議な地域です。人の手がおよばない自然が多数残されており、機会があったら一度は訪れてよい所と思いました。

**平成17年度文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費  
研究成果公开发表(B)による公開講座報告  
「布と糸と針が拓く未来—楽しいものづくり, 創造性育成と技の伝承—」**

**平成17年度公開講座**

**実行委員長 泉加代子 (京都女子大学)**

**はじめに**

平成17年4月1日付で文部科学省科学研究費補助金の交付内示(内示額99万円)の連絡を受けたとお知らせを4月7日に部会長の太田先生よりいただきました。平成15年度、16年度に続いて3年連続で採択されることはないと思っておりましたので、4月早々の嬉しいニュースに驚くとともに何とか無事に、そして過去2回の公開講座に見劣りしないように実施しなければと責任の重さを痛感しました。開催地が広島で何度も足を運ぶには遠い地であり、すべてメールのやりとりで進めていかなければならない状況でしたので、副実行委員長の鈴木先生、堀尾先生はじめ広島地区の7名の実行委員の先生方に多大な負担をおかけすることになりました。また、前日・当日実行委員として中部地区以西の運営委員の先生方と岡山・神戸の部会員の先生方に加わっていただき開催することができました。公開講座を成功裏に終えることができましたのは、部会員の先生方のご協力の賜物と感謝申し上げます。

**<開催日と場所>**

開催日：平成18年3月25日(土)

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ

**<プログラム>**

1. 基調講演 10:20~11:20  
「布と糸と針によるものづくり」  
実践女子大学 高部啓子氏

2. シンポジウム 11:20~12:40

「ものづくりの要素と最新の動向」

コーディネーター 京都女子大学 泉加代子

- ① 素材の要素から  
東京家政大学 雲田直子氏
- ② 道具の要素から  
東京学芸大学 鳴海多恵子氏

③ 技術の要素から  
文化女子大学 佐藤真知子氏

④ 製作法の要素から  
大阪夕陽丘学園短期大学 林仁美氏

3. ワークショップ 13:30~16:00

「たのしいものづくり」

① 布を立体化する「埴輪ルックのスカート作り」  
和洋女子大学 布施谷節子氏

② 布を装飾する  
「ニードルパンチを使ったテキスタイル作り」  
文化女子大学 磯崎明美氏

③ 布をつなぐ  
「ヨーヨーキルトを使ったニューレトロな  
パッチワーク」  
甲南女子大学 森由紀氏

4. デモンストレーション 13:30~16:00

「創造性の啓発」

① 針を使って布を立体化する「ピン・ワーク」  
相模女子大学 田中百子氏

② 糸を使って布を装飾する「絞り」  
三重短期大学 村田温子氏

③ ミシンを使って布をつなぐ「ニットソーイング」  
名古屋学芸大学 白石孝子氏

5. 展示 「布と糸と針が創り出すデザイン」

広島地区実行委員他

講座の内容は前年度を踏襲すればよいということで、講師の先生方は、昨年度と同じ先生方に依頼しました。ところが、諸般の理由から辞退される先生が続出し、基調講演をはじめ11名中5名の講師の先生を新たにお問い合わせすることになりました。その結果、プログラムは前年度と同じでも内容の半分は異なった

ものとなり、新鮮味が出てよかったですのではないかと思います。

基調講演では、「布と糸と針によるものづくり」は、文化・芸術であるだけでなく、コミュニケーション材でもあり、子供の脳の発達や高齢者の脳の活性化を促す効果もあることなど、「ものづくり」を様々な観点から学術的にわかりやすく講演していただきました。

シンポジウムでは、ものづくりの要素として「素材」「道具」「技術」「製作法」の4つを採り上げ、4名のシンポジストが動画などをまじえてそれぞれ工夫したプレゼンテーションをされました。盛りだくさんの内容で意見交換の時間がとれなかったことは残念でした。

ワークショップでは、布を立体化する、布を装飾する、布をつなぐ技法を参加者に実体験してもらい、ものづくりの楽しさ、喜びを実感していただきました。

「埴輪ルックのスカート」「ニードルパンチ」「ヨーヨーキルトのピンクッション」のいずれも短時間で簡単に作れるので、中・高校の授業に取り入れたいとの声がよせられました。

デモンストレーションでは、「ピン・ワーク」絞り「ニットソーイング」の素晴らしいテクニックと作品を披露し、それぞれの技と創造性は参加者に感動を与えて、興味を喚起しました。

会場の一角には広島地区実行委員製作の日本刺繍、フランス刺繍の作品が展示され、短大生の作品によるファッションショーが上映されました。また、今回初めての試みとして、高校生が製作した作品も展示されましたが、大学生に優るとも劣らない出来ばえに驚かされました。

参加者は、高校生15名、大学生19名、中・高校教員25名、大学教員13名、一般10名、講師・実行委員30名で計112名でした。高校生の参加が少なかったのが残念です。

アンケートには56名（内訳：高校・大学生21名、教員・一般33名、不明2名）の回答が得られ、回収率は68.3%でした。それによると、

公開講座の開催を知ったきっかけは、教員・一般は「勤務先への案内・家庭科部会・会員よりの案内」、高校・大学生は「先生からの紹介」が最も多く、部会からの案内だけでなく、実行委員の先生方が参加者集めに積極的に動かされたことが伺えます。参加目的は、前回同様、「ものづくりに興味・関心がある」「被服製作の知識を深めたい」「ワークショップの内容に関心があ

る」が多く、91%の参加者が満足したと回答していました。テキストについても、「カラー写真や図が多くビジュアルで分かりやすい。」「今後活用したい。」「大変好評でした。」

## おわりに

3回目の公開講座ということで、第1回実行委員長大村先生、第2回実行委員長富田先生と各実行委員の先生方の経験に基づいて準備、開催することができました。富田先生からは運営に関するデータを全て頂戴しましたので、今回の講座をスムーズに運営することができました。先生方に厚く御礼申し上げます。

回を重ねるごとに内容もバージョンアップし、十分に成果を上げることができましたが、高校生を対象とした「ものづくり」をテーマとした公開講座は一旦幕を閉じることになりました。

先日、ある高校教員から「高校では知識は教えているが実習は教えていない。若い家庭科教員自身が自分の衣服のボタンが取れたらボタン付けをしないで廃棄している。」という話を聞きました。日本の被服教育は今後どうなるのでしょうか。被服構成学部会が公開講座を通して、「服育」を発信し続けられることを願っています。



## TX記念 第7回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告

東京学芸大学 鳴海多恵子

ものづくり教育フェアは、全日本中学校技術・家庭科研究会が主催する大会である。7年前に技術科のロボコンとしてスタートし、第3回から家庭科の「とっておきのアイデアハーフパンツ」が開始された。昨年からは「あなたのためのお弁当」コンクールも開始され、年々充実した大会となっている。今年の会場参加者は12000人となり(去年は5500人)、広いつくば国際会議場が、中学生、保護者や先生方、協賛企業、一般参加者、報道陣などで大変な盛り上がりであった。このように大々的な規模の大会準備と運営が、中学校の技術・家庭科の先生方によるものであることには、日頃の学校の忙しさを思うと感服するばかりである。

「とっておきのアイデアハーフパンツ」部門には各県の子選を勝ち抜いた16名の中学生が出場した。今年は男子生徒の出場がなかったのは残念だったが、同じ中学校から3名の出場者があるなど、日頃の家庭科教員の指導力を伺わせる一面もあった。審査は5名で行い、昼食、休憩時間を挟んだ制限時間4時間(昨年より30分、短縮された)の中で、裁断から仕上げまで終了させる間の縫製技術、安全への配慮、作業効率を評価するとともに、事前に提出された製作レポート、完成後のファッションショーでの着装、作品の完成度・アイデアなどの評価を加えた総合点で順位を付けている。

全体的に、作業の手際は感動するほどの見事さであるが、しるしつけではルレットを何度も往復させて力いっぱいこすりつけたり、アイロンかけではほとんど霧吹きを使わないなど、基礎的な技術面では多少気にかかる面も見られた。

しかし、完成した作品はいずれもすばらしく、特に製作した本人が着装すると一段と映えて、ファッ

ションショー会場には大きな拍手が湧いていた。

今年は、製作会場に、「ニットの貴公子」こと、広瀬光治さんが訪れた。ファッションショーにも参加し、出場した生徒に講評として温かい言葉をおくっていた。

写真は、被服構成学部会賞を受賞した岐阜県本巣市立真正中学校 丹羽朋子さんの「かぼちゃパンツ with Ribbon」という作品である。本人の作品PRには、”後ろの大きなリボンにワイヤーを入れることで立体的にしてかわいさを出したい。2種類楽しめるものにする。そのままはけばパンツスタイル、スカートを巻き付ければプリーツスカート”とのことであったが、完成した作品はリボンもしっかり形が保たれて、着装した丹羽さんのかわいらしさをさらに引き立たせたすばらしい作品であった。

「ものづくり教育フェア」の詳細については以下のwebページから閲覧できるので、覗いてみていただきたい。

<http://www.ajgika.ne.jp/>



被服構成学部会賞 受賞作品

# 研究報告

## アパレルCAD教育システムの開発

和洋女子大学 山本高美

情報通信技術の発達により、アパレル業界では、衣服の生産工程にCAD/CAMが導入され、効率のよい生産体制が確立しており、顧客のニーズに対応できる、多品種変量生産が可能となっている。そこで、大学での被服教育は、従来からの個別製作の方法に加え、専門職業教育として、アパレル生産の方法やCADを教えることが必要となってきた。CAD教育に関する先行研究等<sup>1,2)</sup>では、被服構成学教育においてCADを用いることは必須であると指摘している。しかし、CADシステムが高価なことから、それぞれの大学における設備条件が大きく異なり、その教育内容や到達点は確立しているとはいえない。

そこで、本研究では、大学の被服構成学教育におけるIT化、および専門職業教育のために、アパレルCAD教育システムを開発した。本研究の成果は、実践力を育成するCAD教育用カリキュラム、授業用テキスト、教育用自動作図機能、CAD eラーニングシステムである。以下に、その概要と特長を示す。

### 1. アパレルCAD教育用カリキュラム

大学・短期大学教員による、CAD教育の現状調査を踏まえて<sup>3)</sup>、被服構成学における専門職業教育としてのCAD教育用カリキュラムを「アパレル業界に通用する人材の育成を目指す」という教育目的に沿って構築した。カリキュラムは、基礎科目として2科目、応用科目として4科目を設定し、CADを実践的に使用できる知識と技能の指導ができるようにした。

### 2. 授業用テキスト

上記カリキュラムに基づき、CAD教育のための基礎科目として設定した「CADパターンメイキングⅠ・Ⅱ」に使用するテキスト<sup>4)</sup>を、それぞれ半期1コマ(約30時間)の内容を目安として編纂した。「CADパターンメイキングⅠ」で使用するテキストは、CADのパターンメイキング機能に重点をおき、平面作図の基礎も指導できるようにした。「CADパターンメイキングⅡ」で使

用するテキストは、工業用パターンの作成に重点をおき、実物入力機能、グレーディング機能、マーキング機能を指導できるようにした。これら2冊により、CADの基礎から実践力までを育成できる。

### 3. アパレルCAD教育用自動作図機能

CAD教育を行うための教材として、新たな教育用機能を付加したレディスパンツ(図1)、メンズパンツ、ブラウスの自動作図機能を開発した<sup>5~7)</sup>。自動作図機能は、各自の寸法で作図でき、短時間での教育に、またデザイン展開の原型として使用することができる。本自動作図機能の教育用としての特長は、(1)作図方法を段階的に表示するステップモード機能、(2)体型に合わせてダーツの本数等を自動的に変更するアウトサイズ対応機能、(3)自動作図の基になっている作図などを参照できる機能の使用・授業用資料の表示機能、である。また、ブラウスの自動作図機能は、ブラウスの作図教育の内容を網羅した、身頃3種、衿9種、袖4種から構成される。これらの自動作図機能は、CADの初級者(CADを学んだことがない者)、中級者(CADパターンメイキングⅠの基礎部分を学んだ者)、上級者(CADパターンメイキングⅠの修了者)の各レベルに合わせて、さまざまな授業方法が可能であり、幅広い使用方法を示した。

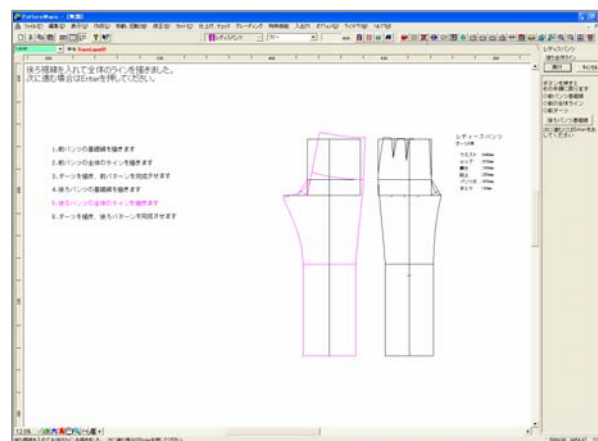


図1 自動作図機能のインターフェース

#### 4. アパレルCAD eラーニングシステム

CAD教育のIT化をさらに進める目的で、これまで開発したCAD教育用カリキュラム、授業用テキスト、教育用自動作図機能を基にし、さらに空間構成能力育成教材を付加して、パターンナー養成を視野に入れたeラーニングシステム(図2)を開発した<sup>8)</sup>。パターンナーの能力として必要である、デザイン画を忠実にパターンに再現できる能力、CADを用いて工業用パターンが作成できる能力を育成できるようにした。

ユーザ評価として、CAD教育用カリキュラムはアンケートとインタビュー、授業用テキストは確認テストとアンケート、教育用自動作図機能はアンケート、eラーニングシステムは使用の前後で確認テスト、使用後にアンケートを行った。カリキュラムとeラーニングは、専門家(教員)5名の評価も得ることができた。これらの多くのユーザ評価により、本教育システムの妥当性、有効性が確認できた。

本カリキュラムとその教材を用いた実践は、CADシステムの導入が思うように進んでいない大学教育において、被服構成学教育におけるCAD教育としての一つの指針となり得る。また、本eラーニングシステムを用いることにより、CADシステムが整備されている大学では、その理論と技能を学習できる。CADシステムがない、少ないという場合でも、CADの概略を指導することができ、CAD教育の裾野を広げる役割を果たすと考えられる。

本研究報告は2006年3月、お茶の水女子大 大学院 人間文化研究科 博士後期課程学位論文による。

#### 謝辞

研究に進めるにあたりご指導いただきました、お茶の水女子大学の坂元章教授、藤代一成教授(現・東北大学)、増永良文教授、駒城素子教授、伊藤貴之助教授に深く感謝申し上げます。

東京学芸大学の田中喜美教授、鳴海多恵子教授、共同研究者の土井美鈴氏(現・シャープ株式会社)、赤坂瑠以氏、東レACS株式会社の寺崎志野社長はじめ社員の皆様、モニターになってくださった多くの先生方、学生の皆様に深く感謝申し上げます。



図2 本eラーニングシステムの特長

なお本研究の一部は、私立大学教育研究高度化推進特別補助(平成14~16年度)、科学研究費補助金基盤研究(B)(平成17~20年度)により実施された。

#### 参考文献

- 1) Bonnie D. Belleau, Elva B. Bourgeois: "Computer-Aided Apparel Design in University Curricula", *Journal Home Economics*, Vol. 83, No. 3, pp. 28-30, 1991.
- 2) Threlfall K. Denise: "Making a Case for CAD in the Curriculum", *Journal of Family and Consumer Sciences*, Vol. 87, No. 1, pp. 21-23, 1995.
- 3) 山本高美, 鳴海多恵子, 田中喜美: "大学におけるCAD教育の現状に関する調査研究", *日本衣服学会誌*, Vol. 47, No. 2, pp. 39-44 (2004)
- 4) 山本高美, 田中喜美, 鳴海多恵子: "大学におけるアパレルCAD入門期用テキストの開発", *産業教育学研究*, Vol. 34, No. 2, pp. 17-24 (2004)
- 5) 山本高美: "CAD Pattern Making 1", 家政教育社, 東京 (2003)
- 6) 山本高美, 土井美鈴, 藤代一成: "アパレルCAD教育のための自動作図機能に基づいたブラウス用ディテールパターンのアーカイブ", *画像電子学会誌*, Vol. 33, No. 5, pp. 696-704 (2004)
- 7) Takami Yamamoto, Misuzu Doi, Issei Fujishiro: "Development of Pants Slopers with Automatic Drafting Functions and Human Body Measurement for Use in Apparel CAD Education", In *Proceedings of CAD/Graphics 2005, IEEE Computer Society Press*, pp. 193-198, Hong Kong, December 2005.
- 8) 山本高美, 坂元章, 赤坂瑠以, 藤代一成: 「アパレルCAD eラーニングシステムの開発と評価」, *日本教育工学会第21回全国大会講演論文集*, pp. 489-490 (2005)

## 関 連 学 会 短 信

### <日本繊維製品消費科学会>

—2006 年年次大会—

日本女子大学 大塚美智子

日本繊維製品消費科学会年次大会は2006年6月10日(土)、11日(日)の2日間にわたり神戸の中心地、三宮駅近くに位置する神戸女子大学教育センターで開催された。第1日目に行われた特別講演は、学校法人行吉学園名誉理事長、貝原俊民氏による「大震災からの復興—美しい兵庫をめざして」であったが、阪神大震災から11年、その復興へのエネルギーの素晴らしさを改めて実感させられた。

繊維製品消費科学会はここ数年、年次大会の発表件数が2桁台と参加者数が低位に推移してきたため、2006年度の年次大会は発表件数3桁を目標にさまざまな形で企画が進められたとのことである。企業の方々の実務・実践報告、新製品紹介・新機能評価法紹介や、研究発表未経験の若手の方々による発表まで、バリアを超えての発表を期待しての試みと、クールビズ・ウォームビズ、スポーツ関連、着装シミュレーションというタイムリーな企画発表が行われたことも功を奏して、発表件数が110件、参加者数255名と盛会であった。出展企業は花王・ライオン・グンゼ・旭化成せんい・ミズノ・アシックス・デサント・デジタルファッション・テクノア・スキノス・レスカ・アドバンスなど12社に及び、実質的に産学連携の形で開催された興味深い内容だった。また、ポスター発表に座長を起用するという試み、企画発表、ポスター発表の時には、原則、一般口頭発表を行わない、企業展示はポスター発表会場に隣接させるなど、企業展示やポスター発表へ参加者を動員するためのいくつかの工夫も図られていた。

本学会は繊維製品に関する研究のみに偏ることのない衣生活全般を広くカバーする学会であり、衣生活に関わるさまざまな領域の研究者、企業を受け入れる数少ない貴重な学会であろう。次年度以降もさらに活発な年次大会となることを期待したい。

### <繊維学会>

—平成18年度年次大会—

横浜国立大学 薩本弥生

平成18年繊維学会年次大会は、6月12日～14日の3日間の日程で東京都江戸川区船堀のタワーホール船堀で開催された。

衣生活関連分野が関係する研究発表は1日目の「消費科学・生活科学」の研究発表と2日目、3日目の「第20回 感覚と計測に関するシンポジウム」であった。

1日目には衣服の力学特性、衣服設計、着衣の温熱・透湿・吸水・通気特性、繊維製品の認知度に関する実態調査等の発表が行われた。

感覚と計測のシンポジウムでは衣服・繊維製品の触刺激、衣服圧、弾性および温熱刺激等の物理要因が人の心理生理反応に及ぼす影響に関する感性評価に関する発表が沢山見受けられた。どちらも同じ部屋で開催され、比較的小さな部屋であったが、興味深い発表がたくさんあり、部屋いっぱい常に人が埋まっていた。質疑応答も活発で盛会であった。

また、1日目には1階展示ホールの交流スペースで「ポスターセッション(一般)」「ポスターセッション(若手)」のポスター発表および「企業・大学研究紹介」があった。私も学会事務局からの依頼があり研究室紹介をさせて頂いた。私が席を空けている間、大学院1年の学生が代理で研究室のPRポスター数枚の前で待機してくれ、企業や大学の先生方の質問に応じてくれた。冷や汗をかきながらも学生には良い勉強になったようである。若手ポスターセッションの発表者の中から優秀発表者を選考し、2日目のワインパーティーで表彰が行われた。



## <服飾文化学会>

### —第7回総会・大会—

相模女子大学短期大学部 田中百子

服飾文化学会第7回総会・大会が、2006年5月13日(土)・14日(日)に同志社女子大学、今出川キャンパスを会場として開催された。両日あわせて会員、一般、学生117名の参加があった。

1日目は口頭発表7件、特別講演『源氏物語』にあられた色と王朝人の色彩観』講師吉岡幸雄氏(染織研究者、染司「よしおか」五代当主)の講演は王朝の雅な文化は、自然界の色の移ろいを衣裳や調度などに取り入れ、特に襲色目の美しさは光と色が透過する羅紗、絹の生絹の薄絹を重ねる微妙な色調の変化である。また、会場と別室に、復元された王朝の装束や襲色目の標本、植物染料が展示され王朝人の色彩美を身近に感じることができた。総会の後、懇親会が行われ、会員相互の交流が図られた。

2日目は口頭発表5件、展示発表12件が行われた。午後は日本最初の公許花街である島原の輪違屋(市の有形文化財)と角屋(国の重要文化財)を見学した。輪違屋では花扇太夫が禿を従えての太夫道中、島原の歴史、江戸吉原の花魁との違い、太夫の衣装、髪型などの話を伺った。角屋は有名な揚屋だけあって各座敷は意匠、工芸の贅を尽くした建物であった。島原花街文化にふれる貴重な機会となった。

研究発表の分野は服飾史、染織文化、省エネのクールビズ、パソコンソフトを利用した衣服デザインなど多岐にわたり、活発な質疑が交わされた。展示はキトラ古墳壁画の服飾の考証、3次元で服のデザインからパターン展開ができる3DCADソフトの作品、染織布、オートクチュール・ブランドへTryした作品を含めた服飾作品、伝統的意匠造形から現代デザインへと展開した作品など、学会の特色である実作品によるプレゼンテーションが行われ、質疑を通して意見交換が行われた。

## <日本衣服学会>

### —第58回(平成18年度)年次大会—

京都女子大学短期大学部 岡部和代

日本衣服学会は、広く衣服全般にかかる諸問題を総合的視野にたつて研究を行っている学会である。第58回年次大会の総会並びに研究発表会は、平成18年10月21日(土)に、京都ノートルダム女子大学で開催された。研究発表は13件で、衣生活全般に関するもの、染色や柔軟剤処理に関するもの、被服構成に関するもの、被服材料に関するものなどで、活発な質疑応答が行われた。特別講演は、京都ノートルダム女子大学教授の鳥居本幸代先生の『源氏物語』に描かれた舞の装束で、雅楽の定義、変遷や、雅楽器と左舞・右舞、動作による舞の区別、源氏物語に描かれた雅楽、舞楽装束などを解説された後、子供たちによる舞が披露され、しばし古都の雅に浸ることができた。

日本衣服学会は、平成10年創設50周年を迎えた歴史ある学会である。衣服学会の前身「衣服研究会」は初代会長の緒方洪平先生により、新制大学が発足した1949年(昭和24年)に京都府立医科大学衛生学教室を事務局として設立、1954年(昭和29年1月)に「衣服学会」が創設された。その後、1984年(昭和59年)4月より「日本衣服学会」と改称、今日に至っている。平成18年度は学会誌創刊50周年にあたり、その記念号が発刊されることになっている。また、平成19年3月24日(土)には、日本衣服学会・科研費研究成果公開講座「衣服を通してアジアの生活文化を知る - 聞いて、見て、触れてみよう -」が名古屋市西文化小劇場で開催される予定で、多くの方々のご参加を期待しているところである。この企画は、平成17年3月に京都で開催された科研費研究成果公開発表会「アジアの中の日本文化を知る - 包む文化と着方の文化 -」に続くものでもある。



## 平成 18 年度 修士論文テーマ・要旨

### 高校「家庭基礎」衣生活領域における授業展開の探求

—新しい視座から衣生活領域を組み立てる—

東京学芸大学 大学院 教育学研究科 松橋由紀美

(指導：鳴海多恵子)

高校家庭科の衣生活領域の学習は、従来、被服製作実習を通して体験的に、実生活との関係を総合的に捉える学習をすることが期待できた。しかし、「家庭基礎」には被服製作実習をおかないこととなっており、授業時数の半減と被服製作実習を行わない構成による授業展開の開発が求められている。本研究は、高校生の衣生活領域の学習に関する意識調査を行った結果、「自己表現」(被服を通して自己の内外面を表現)、「積極的な態度」(被服を通して積極的に生活を高める態度)に関する学習項目に興味・関心が高いこと、実生活を想定した学習展開が効果的であることが示唆されたことから、生活実感に即した新たな視点から、衣生活領域における効果的な授業内容の開発と授業展開を構築した。

### 被服行動における自己表現と自己形成に関する研究

埼玉大学 大学院 教育学研究科 山中大子

(指導：川端博子)

被服行動がいかに青年期の自己形成に貢献しうるかを明らかにすることを目的として、2006年10～11月に質問紙を用いた集合調査を行った。対象者は20歳前後の大学生男女522名である。質問項目は、自己形成的活動としての被服行動、多面的な被服行動、自己成長性、理想自己、自我同一性からなる。

その結果、被服行動の自己形成への貢献には、理想自己への志向性の手段としての被服行動と、被服行動自体が何らかの目的であり自己を導く、という2つのあり方が考察された。毎日の被服行動において、自己を見つめ理想の自己を表現し、他者との関わりにおいて自己に対する気づきを高め、自己を少しずつ理想自己へと近づけていくことが、被服行動における自己表現と自己形成である。

### 衣服の形態適合性に関する研究

—肩部立体形状の把握と類型化—

実践女子大学 大学院 生活科学研究科 高橋佐智子

(指導：高部啓子)

着心地良い衣服の設計に欠かせない肩部形状について、女子大生を対象に三次元計測を行い、形態的特徴を数量的に把握して肩部形状の類型化を試み具体的な形として表現することを目的とした。

2004年11月～2006年11月にミノルタ製非接触三次元デジタル計測機(VIVID910)2台を使用して18～22歳の女子大生128例を対象として三次元撮影を行った。画像の有効な81例の三次元画像上で座標値や断面形状を測定し、25項目を解析項目とした。これらに主成分分析やクラスター分析を適用し、形状を表す要因の抽出及び抽出された要因のクラスター分析から類型化を試みた。その結果、肩部形状を表す4つの要因と4つの類型を取り出すことができた。さらに相同モデルを作成し、視覚的に確認した。

### インフラアパレルと現代衣生活

—ブラジャーの審美性と機能性を中心に—

横浜国立大学 大学院教育学研究科 呉 音

(指導：薩本弥生)

理想のインフラアパレルは審美性と機能性を1枚の衣服で具備したものである。ブラジャーは審美性(シルエット)、機能性(防振性)の両面から重要なインフラアパレルに不可欠のアイテムである。審美性を追求して健康、快適性の面からは問題のある圧迫大のものが好まれる傾向があるが、過度の圧迫は人体生理・心理に多大な影響を及ぼす。ブラジャーの運動機能性は静止時の身体適合性のみならず運動時の動作適合性の観点からも検討する必要がある。ズレ防止に効果的で被験者に負担の小さい快適なブラジャーを素材要因、デザイン要因の最適条件を探ることを目的として種々のブラジャーを試作しズレ感、快適感などの主観評価と動作解析装置によるズレの動態計測、衣服圧の関係から検討した。

# 会 務 報 告

## 1. 平成 18 年度会務報告

### 1) 事業報告

#### ① 総会・夏期セミナー

日時：平成 18 年 8 月 22 日（火），23 日（水）

22 日 10：30～19：30

23 日 9：30～16：50

場所：東京家政大学

#### ② 研究例会

日時：平成 18 年 12 月 9 日（土）

場所：文化女子大学

#### ③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 19 年 1 月 27 日（土）・28 日（日）

場所：茨城県つくば市つくば国際会議場

#### ④ ホームページリニューアル

#### ⑤ 部会誌 28 号発行

平成 19 年 3 月 31 日

### 2) 庶務報告

#### 第 1 回運営委員会

日時：平成 18 年 5 月 28 日（日） 12：30～13：30

場所：秋田大学 一般教育 1 号館 305 教室

#### ① 平成 18 年度事業計画について

- ・平成 18 年度夏期セミナーについて
- ・ホームページのリニューアルについて
- ・平成 18 年度研究例会について
- ・全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

#### ② 平成 17 年度収支決算について

#### ③ 平成 18 年度予算について

#### ④ 部会誌 28 号について

#### ⑤ その他

- ・平成 19 年度科研費の申請について

#### 第 2 回運営委員会

日時：平成 18 年 8 月 21 日（月） 16：00～18：00

場所：東京家政大学 120 周年記念館 2F120-2A

#### ① 平成 18 年度総会について

#### ② 平成 18 年度夏期セミナーについて

#### ③ ホームページリニューアルについて

#### ④ 平成 18 年度研究例会について

#### ⑤ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援について

#### ⑥ 部会誌 28 号について

#### ⑦ その他

- ・19 年度科研費申請について

#### 第 3 回運営委員会

日時：18 年 12 月 9 日（土） 12：20～13：10

場所：文化女子大学 A124 室

#### ① 研究例会について

#### ② 夏期セミナー収支決算について

#### ③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援について

#### ④ 部会誌 28 号について

#### ⑤ 平成 19 年度夏期セミナーについて

#### ⑥ その他

- ・部会入会申込書について

### 3) 会計報告（次頁以降参照）

## 2. 平成 19 年度の事業計画

① 総会 平成 19 年 8 月

② 夏期セミナー 平成 19 年 8 月

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

平成 20 年 1 月

④ 公開講座 平成 20 年 3 月

⑤ 部会誌 29 号発行 平成 20 年 3 月末

⑥ ホームページの維持管理

## 平成17年度収支決算報告（H17. 4. 1～H18. 3. 31）

### (1) 部会会計

(単位:円)

費目		予算	決算	備考
収  入	部会費徴収	400,000	437,500	175件(133名)分
	その他の収入	0	6,300	テキスト販売
	基金より	1,000,000	17,352	
	前年度繰越金	0	0	
計		1,400,000	461,152	
支  出	総会運営費	100,000	78,967	
	部会誌発行費	140,000	139,915	部会誌印刷
	人件費	20,000	0	
	会議費	45,000	15,793	編集会議, 委員引き継ぎ
	庶務費	15,000	3,190	
	通信費	90,000	51,610	部会誌発送等
	交通費	300,000	39,560	委員引き継ぎ等
	事業費	650,000	132,117	研究例会, ものづくり競技会, HP維持費
	消費税相当分	20,000	0	次年度納金予定
	予備費	20,000	0	
	次年度繰越金	0	0	
	計		1,400,000	461,152

**差引残高**

¥0

### (2) 特別会計

#### 活動基金

¥2,067,303

(内訳)	前年度繰越金	1,938,836
	利子	14
	定額貯金満期による利子	145,805
	部会会計へ	17,352

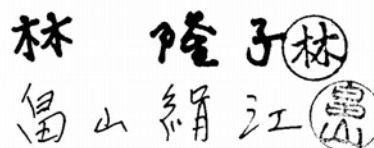
#### 成田基金

¥345,248

(内訳)	前年度繰越金	345,233
	利子	15

会計監査の結果, 上記事項に相違ないことを認めます.

平成18年 5月10日      会計監査


  
 林 隆子 (林)
   
 岡山 絹江 (岡山)

## 平成 18 年度予算

### (1) 部会会計

	費目	本年度予算額	前年度予算額	増減
収入	部会費徴収	400,000	400,000	0
	その他の収入	0	0	0
	基金より	345,248	1,000,000	-654,752
	前年度繰越金	0	0	0
	計	745,248	1,400,000	-654,752
支出	総会運営費	100,000	100,000	0
	部会誌発行費	130,000	140,000	-10,000
	人件費	10,000	20,000	-10,000
	会議費	40,000	45,000	-5,000
	庶務費	15,000	15,000	0
	通信費	70,000	90,000	-20,000
	交通費	55,000	300,000	-245,000
	事業費	290,000	650,000	-360,000
	消費税相当分	20,000	20,000	0
	予備費	15,248	20,000	-4,752
	計	745,248	1,400,000	-654,752

### (2) 基金

	現在高	支出	残高
活動基金	1,767,303	0	1,767,303
成田基金	345,248	345,248	0

# お 知 ら せ

## 1. 会費納入について

平成19年度の被服構成学部の会費2500円は、5月中に下記郵便払込口座にご送金くださるよう、お願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00150-8-356080 (社) 日本家政学会被服構成学協会

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願い致します。

〒272-8533 千葉県市川市国府台2-3-1

和洋女子大学 衣生活研究室 布施谷節子 宛

TEL 047-371-2196 (ダイレクトイン)

FAX 047-371-1336 (代表)

E-mail fuseya@wayo.ac.jp

## 2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは下記までお願いいたします。

〒228-8533 神奈川県相模原市文京2-1-1

相模女子大学短期大学部 生活造形学科 田中百子宛

TEL 042-749-4908 (ダイレクトイン)

FAX 042-743-4717 (代表)

E-mail momo@sagami-wu.ac.jp

※ なお、退会届につきましては(社)日本家政学会の退会手続きとは別処理になっておりますので、部会への手続きも併せてさせていただきますようお願いいたします。

## 3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成19年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

## 4. 平成18年度新入会員

青木美保子(神戸ファッション造形大学(非)), 大澤香奈子(平安女学院大学)

木下教子(浅井学園大学), 定延久美子(大阪樟蔭女子大学), 三沢徳枝(創造学園大学)

## ご 案 内

### 平成 19 年度被服構成学部会総会ならびに夏期セミナー

開催期日 : 平成 19 年 8 月 27 日 (月), 28 日 (火)

会 場 : 1 日目 神戸ファッション美術館 第 1 セミナー室

〒658-0032 神戸市東灘区向洋町中 2-9-1

2 日目 神戸女子大学教育センター

〒650-0004 神戸市中央区山手通 2 丁目 23-1

総会・夏期セミナー 「ファッションの魅力」

#### プログラム概要

時間	8 月 27 日 (月)	時間	8 月 28 日 (火)
12:30	受付開始	9:30 - 11:00	講演 「宝塚歌劇団の舞台衣装のデザイン」 (仮題) 宝塚歌劇団衣装デザイナー 任田 幾英 氏
13:00 - 13:10	開会の辞	11:10 - 11:50	事例研究 1 「紙衣和紙の研究」 (仮題) 大阪樟蔭女子大学 定延久美子 氏
13:10 - 14:40	基調講演 「アンダーウェアとプロポーションの歴史」 神戸ファッション美術館学芸員 百々 徹 氏	11:50 - 12:30	事例研究 2 「新しい美の創造—芸術が生み出した衣服—」 (仮題) 滋賀県立大学 森下あおい 氏
14:50 - 15:20	総会	12:30 - 12:40	閉会の辞
15:30 - 17:00	神戸ファッション美術館展示室見学 特別展示 —ココロのロココ— 華麗なる 18 世紀宮廷衣装展 (仮称) 解説 百々 徹 氏	12:40 - 13:30	昼食休憩
18:00 - 20:00	懇親会 ホテルプラザ神戸 18 階 穹 (SORA) の間	14:00 - 16:00	見学会 ①林サリー (インドサリー着装) ②北野クラブ SORA (ウェディングドレス) ③クチュール ナオコ (ドレスショップ)

※ 部会員には追って詳細をご案内申し上げます。

連絡先 〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町 35

京都女子大学短期大学部 岡部和代

TEL 075-531-7169 FAX 075-531-7170

E-mail okabe@kyoto-wu.ac.jp

## 社団法人日本家政学会被服構成学部会 会則

- 第1条(名称) 本会は、社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。
- 第2条(目的) 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。
- 第3条(事業) 本会は、前条の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 総会を開催する。
  - 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
  - 3 部会誌を発行する。
  - 4 その他の必要な事業を行う。
- 第4条(会員) 本会の会員は、次のとおりとする。
- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する社団法人日本家政学会会員で、本部会の目的に賛同して入会した個人。
  - 2 名誉会員 元部会長、または、特に部会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。
- 第5条(入会) 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。
- 第6条(退会) 会員が退会をしようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。  
この場合、既納の会費は返却しない。
- 第7条(役員) 本会に次の役員をおく。
- 部会長 1名  
副部会長 2名  
運営委員 若干名  
監事 2名
- 第8条(役員を選任) 役員を選任は、次のとおりとする。
- 1 部会長および監事は、運営委員会がこれを推薦し、総会で選任する。
  - 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。
- 第9条(役員任期) 1 役員任期は2年とし、再任を妨げない。  
2 役員再任については、申し合わせを別に定める。
- 第10条(役員職務) 役員職務は次のとおりとする。
- 1 部会長は部会を代表し、会務を統轄する。
  - 2 副部会長は部会長を補佐し、必要な場合には部会長の職務を代行する。
  - 3 運営委員会は本会の業務を運営する。
  - 4 監事は本会の会計監査を行う。
- 第11条(会計) 本会の会計は次のとおりとする。
- 1 経費は正会員の会費、その他をもってまかなう。
  - 2 会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月末日に終了する。

以上

## 附則

- 1 この会則の改正は、総会の議決による。
- 2 施行に関する内規は別に定めることができる。
- 3 この会則の施行は昭和54年10月8日からとする。
- 4 この会則の一部改正の施行は昭和59年8月3日からとする。
- 5 この会則の一部改正の施行は昭和63年8月1日からとする。
- 6 社団法人日本家政学会部会規程に基づき、平成15年8月27日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。
- 7 この規約の施行は平成15年8月27日からとする。
- 8 社団法人日本家政学会部会規程に基づき、平成18年8月22日から被服構成学部会規約を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする。
- 9 この会則の施行は平成18年8月22日からとする。

## 社団法人日本家政学会被服構成学部会 申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成し、その中に庶務3名（1名は部会誌編集担当）、会計2名をおく。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。  
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事及び編集幹事 (1) 必要に応じて事務局幹事及び編集幹事をおくことができる。  
(2) 事務局幹事及び編集幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。  
(3) 事務局幹事及び編集幹事は役員会に陪席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。

## 附則

この申し合わせは、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約に基づくもので、改正にあたっては、運営委員会の議を経て、総会で承認する。

1. この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。



## 平成 18・19 年度役員

部会長	猪又美栄子	昭和女子大学
副部会長	泉 加代子	京都女子大学
	雲田 直子	東京家政大学
運営委員		
(庶務)	田中 百子	相模女子大学
	千葉 桂子	福島大学
	森 由紀	甲南女子大学
(会計)	布施谷節子	和洋女子大学
	呑山委佐子	大妻女子大学
	服部由美子	福井大学
(企画)	佐藤眞知子	文化女子大学
	岡部 和代	京都女子大学
	原田 妙子	名古屋女子大学
	増田 智恵	三重大学
(広報)	大塚美智子	日本女子大学
	鈴木 明子	広島大学大学院
	鳴海多恵子	東京学芸大学
	林 仁美	大阪夕陽丘学園短期大学
(編集)	川上 梅	東京家政学院大学
	川端 博子	埼玉大学
	山本 高美	和洋女子大学
(監事)	別府 美雪	共立女子大学 (非)
	高部 啓子	実践女子大学
	金谷 喜子	大妻女子大学

事務局 〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7

昭和女子大学 生活環境学科

TEL 03-3411-4364

FAX 03-3411-6792

E-mail inomata@swu.ac.jp



**(社) 日本家政学会被服構成学部会入会申込書**

申込年月日	年 月 日	受付年月日	年 月 日
ローマ字			
氏名	氏	名	
西暦 19 年生	性別	男 女 (どちらかを○で囲む)	
家政学会所属支部			
自宅住所	〒( — )		
	TEL		FAX
	E-mailアドレス		
勤務先・職名 及び所在地	勤務先		職名
	〒( — )		
	TEL		FAX
	E-mailアドレス		
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>		
最終学歴			
学位			
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)		

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

- ◆ 個人情報保護には十分に注意をいたします。
- ◆ 部会申込書は被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL : <http://h-kohsei.com>



## 編集後記

平成 18 年度の部会誌第 28 号をお届けいたします。従来は、集まったり FAX を使用したりして編集の仕事をしておりましたが、IT が普及した現在、Web 上でのやりとりやメールで仕事ができるようになりました。なお、部会誌第 27 号（平成 17 年度）は <http://h-kohsei.com/bukaishi.html> でもご覧いただけます。

(川上)

卒論・修論発表会も一段落し、28 号部会誌にも目処がつきました。学生指導においては平坦な道のりばかりではないのですが、終盤の伸びには目を見張るものがあり頼もしく感じます。部会誌の編集にも若手の先生方が力を発揮してくださいました。若い力は大きいです。本会誌が若い方々の参加・活動のきっかけに貢献できればと願っています。

(川端)

平成 19 年 3 月 31 日・発行

発行：(社) 日本家政学会 被服構成学部会

印刷：(株) 東京アート印刷所

TEL：03 - 5608 - 2581

